

次の文は戦国時代、楚の政治家・文学者の屈原の作である。楚王の一族で、懷王に仕え、三閭大夫（＝王室の司る長官）となつた。潔癖な性格で、衰えかけた国政を盛り返し、世の乱れをただそうとしたが、反対派の讒言にあつて追放された。

屈原既放遊於江潭、行吟沢畔、顔色憔悴、形容枯槁。

漁父見而問之曰、子非三閭大夫与。何故至於斯。

屈原曰、举世皆濁、我独清。

衆人皆醉、我独醒。是以見放。

漁父曰、聖人不凝滯於物、而能与世推移。

世人皆濁、何不汙其泥、而揚其波。

衆人皆醉、何不餽其糟、而歠其醢。

何故深思高举、自令放為。

屈原曰、吾聞之、新沐者必彈冠、新浴者必振衣。

安能以身之察察、受物之汶汶者。

寧赴湘流、葬於江魚之腹中。

安能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃乎。

漁父莞爾而笑、鼓枻而去。乃歌曰、

滄浪之水清兮、可以濯吾纓。

滄浪之水濁兮、可以濯吾足。

遂去、不復与言。

【語注】

- 1 既放＝「既」は下につく動詞の動作が完了したことを示す。屈原は追放されてしまひ、の意。この時屈原は讒言により無実の罪で追放された。
- 2 斯＝こんな境遇。
- 3 汙其泥＝その泥水をかき混ぜて。
- 4 餽其糟＝その酒粕を食べる。
- 5 歠其醢＝そのかす汁を飲む。
- 6 深思高举＝深く思い詰め、孤高の態度を取り、の意。
- 7 新沐＝この「新」は、洗ったばかり、の意。「沐」は、髪を洗う意。
- 8 彈＝指で弾く。
- 9 察察＝潔く聖らかな様子。
- 10 汶汶＝汚れている様子。
- 11 皓皓＝汚れない様子。
- 12 莞爾＝にこりする様子。
- 13 鼓枻＝櫂の音をたてながら船をこいで。「鼓」は音を立てる、「枻」はオール、の意。
- 14 滄浪＝漢水の別名。長江に注ぐ。
- 15 纓＝冠のひも。

配付日 月 日 組 番 氏名

問1 人物に○をつけ、同じ人物には同じ記号をつけよ。また、会話には「」をつけよ。

問2 傍線a、eの読み方を答えよ。

a	は	b	を	c	むる	d	に	e	に
---	---	---	---	---	----	---	---	---	---

問3 「や」「と」とともに「以外の「与」の読み方をすべて答えよ。

問4 二重傍線A、Eの表現はそれぞれどのようなことをいつているのか。説明せよ。

A	B	C	D	E
---	---	---	---	---

問5 自分で本文中に傍線を引いて記述問題を作り、その解答案を作成しよう。

設問

解答案

--	--

【楚辞】

戦国時代の楚の屈原の作った辞と、その門人や後人による屈原に倣った作品とを集めた書物。楚辞とは、楚の国の「辞」というジャンルの文学。黄河流域の北方民族によって作られた『詩経』が音楽に合わせて歌った詩であるのに対し、『楚辞』は長江流域の南方民族が作った朗唱する韻文である。

【現代語訳】

（そのとき）屈原は追放されてしまい、川の淵の傍らを彷徨い、川のほとりを歩きながら詩を口ずさんでいた。顔つきはやつれ果て、姿はやせ衰えていた。一人の年老いた漁夫がその様子を見て屈原に尋ねた。「あなたは三閭大夫殿ではありませんか。一体どうしてこのような目にお遭いなさったのですか」と。屈原が答えた。「世の中の人全てが汚れてしまったのに、私一人は清いままだ。人々が皆酔ってしまったのに、私一人は覚めたままだ。このために追放されてしまった」と。  
年老いた漁夫は言った。「聖人というのは、私一人は物事にこだわることなく、上手に世の流れに身を任せることができるもの。世の人が皆濁っているのならば、どうして泥水をかき混ぜて、泥の波をおこさないのですか。人々が皆酔っているのならば、なぜその酒の糟をくらって粕汁まですすろうとなさらないのですか。何のために深く思い詰め孤高を守ろうとして、自ら求めて追放されるのでしょうか」と。  
屈原は言った。「私はこう聞いている、『髪を洗ったばかりの人は必ず冠の塵を指で弾き落とし、体を洗ったばかりの人は必ず衣を振るって塵を落とす』とか。どうして潔白なこの身に汚れたものを受け入れられるだろう。いっそ湘江の流れに身を投げて、川魚の餌になったほうがよいぐらいで、一体どうしてまばゆいこの白さに、世俗の塵芥をかぶることなどできようか」と。  
年老いた漁夫はにつこりとほほえみ、オールの音を響かせながら船をこぎ出して去った。そこで歌ったことには、  
滄浪の流れが澄んだのならば 自分の冠のひもを洗おうか  
滄浪の流れが濁ったのならば 自分の足を洗おうか  
かくてこぎ去り、再び屈原と語り合うことはなかった。

重要単語 単語選・入門漢文で確認しよう

3遊Ⅱ① ② ③ 10子Ⅱ 4是以Ⅱ

入36 見被為所＋VⅡ〔受身形〕

48何不Ⅱ 入32 A使令教遣 B CⅡ〔使役形〕

6安Ⅱ〔いづクンゾ〕 〔いづクニカ〕

7乃〔すなはチ〕Ⅱ① ② ③ 7遂〔つひニ〕Ⅱ

配付日 月 日 組 番 氏名

屈原<sup>らげん</sup>既<sup>ニ</sup>放<sup>タレ</sup>遊<sup>ビ</sup>於<sup>ニ</sup>江潭<sup>ニ</sup>行吟<sup>ニ</sup>沢畔<sup>ニ</sup>。顔色憔悴<sup>シ</sup>形容枯槁<sup>ス</sup>。漁父見<sup>テ</sup>而問<sup>ヒテ</sup>之曰<sup>ニ</sup>子非<sup>ハ</sup>文<sup>ズ</sup>▼

三閭大夫<sup>ニ</sup>与<sup>ヤ</sup>何故<sup>ノ</sup>至於<sup>ニ</sup>斯<sup>ニ</sup>。屈原曰<sup>ク</sup>拳世皆濁<sup>ニ</sup>我独清<sup>リ</sup>衆人皆醉<sup>ス</sup>我独醒<sup>リ</sup>。是以<sup>ニ</sup>2025

見<sup>タリトク</sup>放<sup>タ</sup>。漁父曰<sup>ク</sup>聖人不凝滯<sup>ニ</sup>於物<sup>ニ</sup>而能<sup>ク</sup>与<sup>レ</sup>世推移<sup>ス</sup>。世人皆濁<sup>ラバソ</sup>何不<sup>ニ</sup>澼<sup>ニ</sup>其泥<sup>ニ</sup>而揚<sup>ゲ</sup>中<sup>中</sup>▼

其波<sup>ノ</sup>衆人皆醉<sup>ハバソ</sup>何不<sup>ニ</sup>鋪<sup>ニ</sup>其糟<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>歎<sup>ス</sup>其醜<sup>ニ</sup>何故<sup>ノ</sup>深思高举<sup>ヒ</sup>自令<sup>ニ</sup>放<sup>タ</sup>為<sup>ル</sup>。▼

屈原曰<sup>ク</sup>吾聞<sup>ケリ</sup>之新沐者必彈冠<sup>ニ</sup>新浴者必振衣<sup>ニ</sup>。安能<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>身之察察<sup>タルラ</sup>受<sup>ケンヤ</sup>物之汶<sup>10</sup>

汶者<sup>タルヲ</sup>寧<sup>ロ</sup>赴<sup>キテ</sup>湘流<sup>リウニ</sup>葬<sup>ニ</sup>於江魚之腹中<sup>ニ</sup>安能<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>皓皓<sup>カウ</sup>之白<sup>キ</sup>而蒙<sup>カフ</sup>世俗之塵埃<sup>ヲ</sup>乎<sup>ト</sup>。▼

漁父莞爾而笑<sup>ヒ</sup>鼓枻而去<sup>ル</sup>。乃歌曰<sup>ク</sup>滄浪之水清兮<sup>マバ</sup>可<sup>シ</sup>以濯<sup>テ</sup>吾纓<sup>ガスイ</sup>滄浪之水濁<sup>ラバ</sup>

兮<sup>12</sup>可<sup>シ</sup>以濯<sup>テ</sup>吾足<sup>ガ</sup>遂去<sup>リ</sup>不復<sup>タ</sup>与<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>。▼

課題 グループの中で良問を選び、ブラッシュアップして提出する。

設問	
解答案 採点基準	

解説(根拠を示し、相手が納得するように説明する。)

グループ提出用 組 班員 ( . . . )

配付日 月 日 組 番 氏名

課題 グループで相談の上、あとの問に答えよ。

問1 人物に○をつけ、同じ人物には同じ記号をつけよ。また、会話には「」をつけよ。

問2 傍線a、eの読み方を答えよ。

a	は	b	を	c	て	d	むる	e	に
---	---	---	---	---	---	---	----	---	---

問3 「や」「と」「ともに」以外の「与」の読み方をすべて答えよ。

問4 二重傍線A、Eの表現はそれぞれどのようなことをいつているのか。説明せよ。

A	B	C	D	E
---	---	---	---	---

問5 漁父は何者だと考えられるか。

問6 「莞爾時笑」には、漁父のどのような気持ちが込められているか、考えてみよう。

設問5

なぜ漁夫は笑ったのか。E

解答案  
採点基準

自分は曲げてしまった自分の生き方も屈原は曲  
げようとしなかったのび、自分の分も頑張ってくれと思いつ  
くうせ無理ではないとなんとも言えない気持ちになつたため。

解説(根拠を示し、相手が納得するように説明する。)

グループ提出用

班員)

屈原は自分の生き方を貫くが漁夫はこれは  
無理であると考えたため、とそうとするが、  
曲げないためでもうどうでも良いと思いつつ  
かんばつて欲しいなあと思つていることが分かる。

課題

設問6

「漁父莞爾而笑」とあるが、これはなぜか。文章全体をよみ入って答えよ。  
E

解答案  
採点基準

漁父は三閭大夫の顔を知り、こゝろから、かつて政治に携わる者だたと考えようとする。  
屈原は政治の信念を問ひ、彼の不変の覚悟を確認して最後に笑つてゐることから、かつての  
漁父自身の政治的信念が屈原に似てたと考えられ、自身の過去の決意と屈原と重ねたから。

解説(根拠を示し、相手が納得するように説明する。)

- ① 漁父の政治に関心があり、② 屈原の政治信念を確かめたい。
- ③ 彼のかつての政治信念が屈原と重なる。

本文二行目から、漁父が三閭大夫のことを認知してゐることがわかる。

三閭大夫は王室の司馬長官であり、あまり大層な文才はない彼をたづねてゐることから  
漁父が過去に政治に携つたことを考えられ、屈原の登壇のつた政治を求めつづけたことに對し、  
いかに遠慮した立場から屈原を見る漁夫は、屈原の理想とする政治がうまくはいかない  
ことを知り、こゝろから、漁夫自身、もしくは漁夫の近づくような政治を目指す  
者かいたと考える。その姿は屈原と重なり、こゝろから、漁夫自身と見るような、純粋な屈原を見る  
笑つた(ははえんた)のたつたことがわかる。

グループ提出用

班員)



グループの中で長問を選んだ

屈原は後に汨羅江に入水自殺したことが知られているが、その行動に至った心理変化を幾分か追放された時点よりまどぎたさい

楚の国政にはかゝった不正に嫌気がさし、国を出て破浪中に漁夫と出会い、黄泉を并立させたが、最後には秦によう楚の都を陥落し、楚の將來に絶望した。

全

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%81%88%E5%9E%9F>

入小自給した直ぐの原因は、其の首領が随分強し、絶好王位のためであり、由來は本文の内幕を問いてゐる問題ではない。この強さ知、というものが問われている。格業を問いては、然る高貴を志すをわす問て下つた。

## 班員

その中で良問を選

屈原と漁父の考文方の違いと名字をめて説明せよ

原原はく、自昔自身は世俗に女を悩まして、改善を圖り  
 挫折しても考へてき入ようとしなひのを知し、漁父は  
 世の中が窮つてしまつてゐるやうに考へ、自今もまよに同調し  
 てゐて、生まればよいといふ考への違い。

本文には「屈原」と漢名の「屈原」の二名の人物が應ずる處に、又「屈原」に「屈平」とは同じものの、それだけの「齊言」が本文にいくつがある。まずその「齊言」を認め、しためて主語を判斷し、考證する。屈原の齊言は「自身」の齊言を齊言として不實をたゞたき、心應ひられよめに對し、漁夫最言はる世の中に自身を含め、考へて齊言をたかぬ。こゝを「齊言」の應ひられ、如斯の考證とす、いふ、また、屈平と漁夫の身、心、の差から、それらが別なりとも、應ひられよむたう。

班員（

設問1

傍線部「漁夫莞爾而笑」とあるが、何故漁夫は笑ったのか。  
文中の双方の会話を踏まえて簡潔に答えよ。

解答案  
採点基準

世の中の流れに身を任せ上手く世を渡る「聖人」という考えの漁夫は「屈原の潔白が金」といつ考えに對し諷刺を試みたが、頑なに屈原の意見を交えなかつたため、漁夫は屈原とそれ以上意見を交わすのは無駄と判断し、諷刺する三言で屈原は屈原の考えを貫けば良いと考えたから。(十一点満点)

解説(根拠を示し、相手が納得するように説明する。)

屈原は「举世皆濁我独清衆人皆醉我独醒」「吾聞之新沐者必彈冠新浴者必振衣」だし、かうあつたように、いかなる場合でも潔白をとりぬこうとしているのだから諷刺は「世は皆濁るを故為」などばかりあつたように屈原の考えに反論しているのです。  
屈原はあくまでも考えを交えなかつたために屈原を諷刺しようとしても無駄だと思ひ、屈原は屈原の考えを貫けばよいと思ひ、たのであつた。

グループ提出用

班員( )

設問2

傍線部「笑」とあるがなぜ漁夫は入水しようとしていた屈原に笑ひかけたのか簡潔に答えよ。  
ただし、解説により複数の解答も可とする。

解答案  
採点基準  
(3点満点)

1 世の中が濁ることも監視できずにはいられず、屈原の入水は必らずしも「難いもの」の議論を通じて入水の引を取めて諷刺した。  
2 屈原の議論を通じて考えを変え、入水も間違ひするのではなく潔白を貫く屈原の考えを尊重しようという心情になつたから。  
1 1 1 1 1 1

解説(根拠を示し、相手が納得するように説明する。)

漁夫が群衆に取つた内容から漁夫の心情を読み取る。

① 皆の心が濁つてしまつたならば官職を辞することは必然のことであり入水しようとするほと思ひ悩むことではないという達観している姿勢。  
② 世の心が濁つたならば入水しようとする屈原の強い意志に押され、負けたくないという姿勢。  
③ 屈原の「唯吾足」の解釈が、俗世から足を洗うならば、「吾世から足を洗うならば」の解答になる。

グループ提出用

班員( )